

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 石川 博樹

現在のエチオピア北部とエリトリアの高原地帯を13世紀後半から18世紀後半にかけて支配したキリスト教王国は、君主が古代イスラエル王国のソロモン王の後裔と称したために、ソロモン朝と呼ばれる。本論文は、通説では衰退の一途をたどったと見なされてきたこの王朝の後期の歴史に、ゲエズ語（古典エチオピア語）文献、ポルトガル語で記されたイエズス会士の報告、ヨーロッパ諸語の旅行記などの史料を駆使して再検討を加え、王権と地方諸勢力の関係や民族移動に伴う政治・社会の変動の実態を解明した研究である。先行研究が史料の記事を鵜呑みにし、それをつなぎ合わせて「エチオピア中世史」と称していたのに対し、綿密な史料批判に基づいて、通説に変更を迫った点に重要な意義が認められる。

1270年に成立したソロモン朝エチオピア王国は15世紀に最盛期を迎えたが、16世紀に東からイスラム勢力、次いで南からオロモと呼ばれる異民族の進入を受けて弱体化し、版図は最盛期の半分程度にまで縮小した。ソロモン朝後期と呼ばれるのはその後の時代であるが、この間の歴史について、従来の研究では特に次の2点が未解明の課題として残されている。まず、一旦弱体化した王国はその後ゴンダールを都として再建されたが、これを可能とした歴史的要因が明らかでない。また完全に弱体化したように見える王権が18世紀に至ってもなお存続し、ソロモン朝に代わる新たな王朝を樹立しようとする動きが見られないのも不可解である。これらの点を解明するために、主として史料論を展開した序論に続いて、本論では財政、統治体制、軍制、オロモの進入と定着、州統治者の出自、エチオピアの王位継承資格等の重要テーマが、六つの章に分けて論じられる。その結果、次のような結論が得られた。

ソロモン朝の後期にオロモの進出が続くなかで、王のイニシアティブで財政、統治体制、軍事にかかわる改革が実施され、王国の再建に大きく寄与した。王権が漸進的に衰退したと見なされた時期においても、実際には王と州統治者の妥協によって、政情の安定化が図られていた。また州統治者レベルの地方有力者の勢力も決して安定したものではなく、新旧勢力の交替の激しいことが明らかになった。また、ソロモンの末裔にしか王位継承の正統性を認めない伝統が王朝交替の障害となっていたことも確認された。このように、従来は単純化されてきたソロモン朝後期の歴史過程が、実は複雑で多面的なものであることを、史料の綿密な分析と慎重な考察に基づいて明らかにした功績は大きい。

章を単位としたテーマごとの研究は緻密であるが、対象となる時代全体の描き方にダイナミズムが乏しいとか、ゲエズ語やポルトガル語の手稿本の探索がなお十分でない等の注文が審査委員からつけられたものの、本論文が全体として高度な学術的内容を備え、ソロモン朝後期のエチオピア史研究において、国際的に見ても遜色のない重要な貢献であることは間違いない。よって審査委員会は、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものであるとの結論に達した。